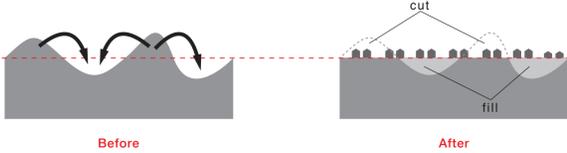


痕跡のまち

— あたりまえに暮らすまちの姿 —



東日本大震災では津波による災害に隠されて、あまり大きく取り上げられることがなかったが、地すべりによる被害が発生していた。災害が発生した場所を見ると、古くからある斜面地の集落よりもむしろ都市近郊の住宅地に多く見られた。被害の発生した場所はほとんどが盛土造成地であった。盛土造成とは起伏のある山地の谷部分を埋め立てることで住宅の敷地となる地面を人工的に造成することである。



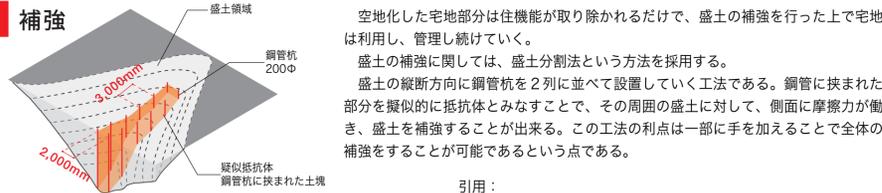
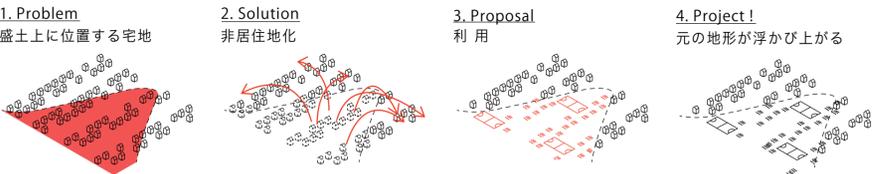
盛土造成は工業製品化した住宅を設置することのできる平坦な「敷地」を大量に生み出すために行われてきた。ここには、その場所で人がいかに暮らすか、という視点はない。しかし、よく考えてみれば、土を大量に積み上げてその上で暮らす、というのはとても恐ろしいことをしているのではないかと、思えてきた。そこで、ここでは盛土による造成宅地における防災をキーワードとして、郊外のあり方を考える。

盛土造成による郊外住宅地に関して考えるのには、2つの理由がある。1つ目は人口が減少しているからで、高度成長期、郊外開発は急激な都市人口の増加を吸収するために行われた。しかし、現状、人口が減少し、高齢化が進むことで、都市郊外に住むことが意味を持たなくなっている。そしてもう1つは、土木分野において、1から高強度の造成を行う方法については新たな提案がなされているものの、既存の造成地をいかに扱うかについては解決されていないからである。というより、そもそも土木分野で物理的に解決することはできそうもない。使い方など、空間の問題として解決できないだろうか。



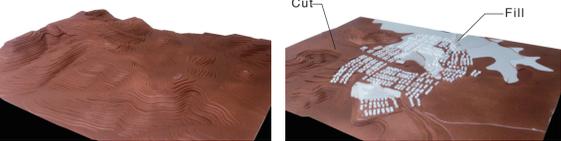
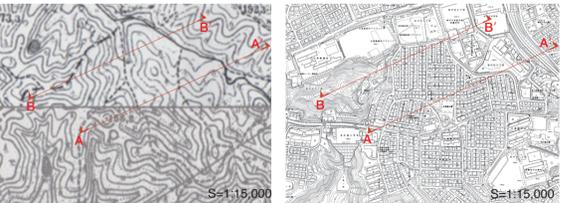
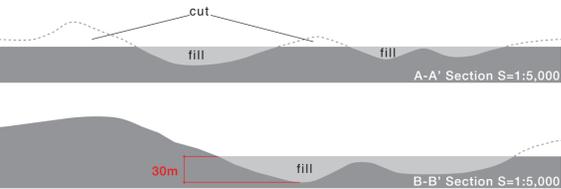
01. 方針 — 空地化と補強 —

空地化 人口が減少することで他にも住む場所が空き始めているにも関わらず、危険と分かっている場所に住み続けるべきではない。そこで、盛土上に住宅を持つ住民には住宅を移設してもらい、盛土上の宅地に住むことのないようにしていく。この空地化によって、時間をかけて均質な住宅地の中から盛土によって造成された土地があぶり出されていく。



02. 敷地

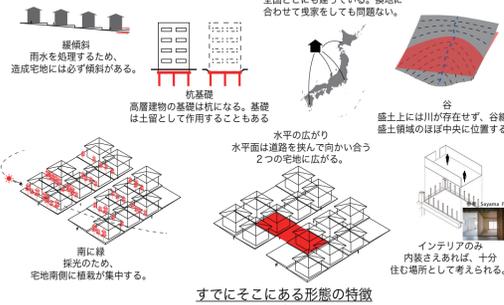
神戸市須磨区の名谷駅周辺を敷地として提案を行う。高度成長期の大阪・神戸の都心部の人口増加を受け止めるために、開発された団地で、元は起伏に富んだ山地であった。盛土造成により、大規模宅地が生み出された。



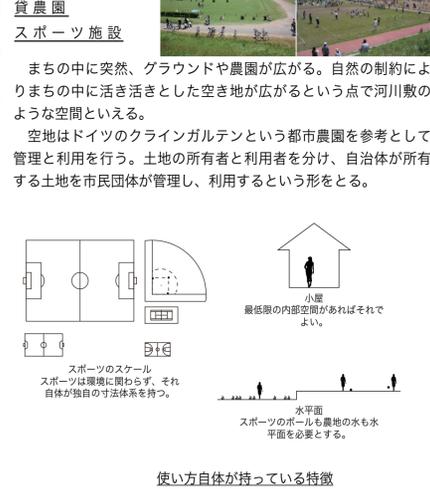
03. 提案

手法 — 形に従う —

造成宅地では一般的に、突然建設されたために時間の蓄積がない、そこで、その場にその時点で存在している形態のみに基づいて、設計を行う。つまり、ここで考えるのは、計画に基づいて形態がつくれるのではなく、その場に存在している形態に対して計画が場当たりに適用されていくということである。すでにそこにある形態の特徴を読みとること、使い方自体が持っている特徴を読みとることを平行で行う。こうして得られた形態の特徴は単体ではある利用方法に適した形態、というだけであるが、他の形態の特徴と衝突することで、新たな意味を見出すことができる。



プログラム



03. 空間

